

# 鯖江藩における「漢詩」学習の研究

前 川 幸 雄

本稿は福井県鯖江市に現存する旧鯖江藩関係の漢詩勉強会の「漢詩集」を研究し、鯖江藩における漢詩学習の状況を明らかにすることを目的とする。

## 1. 藩校における詩文の学習

1788年(天明8年)京都より、藩儒臣として鯖江藩に招かれた芥川元澄(思堂)は家塾を開き、藩士並びにその子弟の教育に当たった。文化11年(1814年)5月1日、六代藩主詮充(1812年・文化9年～1814年・文化11年、藩主在職2年4ヶ月)は中小路に稽古所を創立し、思堂の子玉潭(轍)を師範とした。稽古所では、孝経・小学・近思録・四書・五経・左国史・漢などの書籍を、朝五ツ時(午前八時)から昼九ツ時(正午)まで教えた。午後は日を定めて講釈や数人が輪番で次々講義をする輪講、詩文会が行われた。

七代藩主詮勝(1814年・文化11年～1884年・明治17年、藩主在職48年2ヶ月)は天保13年(1842年)には稽古所を「進徳館」と改めた。詮勝は弘化3年(1846年)に進徳館規則・学規・職名及び俸禄・祭儀など学制の詳細にわたって改定をし、藩校の発展を図った。

進徳館規則によれば、一月十二日が学校開きで、始業は十七日、終業は十二月十六日で、あとは休業とし、春秋二回儒学の祖孔子を祀る丁祭を行った。授業は、午前中は素読・復読・教示が行われた。午後は三・八の日は歴史、五・十の日は復読、七の日は講釈、四・九の日は輪読、三の日は詩文会が実施された。五日に一日休日があったが、ほかに五節句・盆・祭礼・藩主に総出仕した日も休みとなった。<sup>1)</sup>

## 2. 研究資料について

鯖江藩第8代藩主問部詮実(1830年・文政10年～1863年・文久3年、藩主在職1年)は、古今のいろいろな文献や資料を写し取り、また自分の見聞したことを筆まめに記録している。それらは『待月亭問筆』『待月亭漫筆』『待月亭雑誌』『汲古窟信筆』と題されるもので、81巻からなっている。(これは「安房守文庫」<sup>2)</sup>と総称される。)これらの中には個人の作品を筆写した「個人の漢詩集」があるが、他に藩士の漢詩勉強会の作品を記録した「合同の作品集」とも言うべき「合同漢詩集」が見られる。

本稿では「安房守文庫」に収められている「合同漢詩集」五点と個人及び大学図書館が所蔵する二点の合計七点を研究の対象として取り上げる。

なお、詩集には七代藩主詮勝の雅号「松堂」が見える。従って、1814年・文化11年から1862年・文久2年までの48年間の状況が研究対象であるということになる。

研究する詩集は以下の七種の詩集である。

(一)『鯖江詩稿之写』(『待月亭問筆』第二十卷所収)

- (二) 『吟草』(『待月亭漫筆』第二十三卷所収)
- (三) 『詩稿』(『待月亭漫筆』第二十三卷所収)
- (四) 『進徳館詩集』(『汲古窟信筆』第九卷所収)
- (五) 『進徳社詩』(『汲古窟信筆』第十卷所収)
- (六) 『汲古窟詩集』(青柳宗和家蔵, 写本)
- (七) 『進徳詩集』(福井大学図書館蔵, 写本)

これらの漢詩集について先ず、書誌を記し、「漢詩集」の構成と、作詩状況とそこに見られる学習状況の特徴などについて説明することにする。なお、参考として巻頭の一首を訓読する。

### 3. 作品集の研究

#### 3. 1 『鯖江詩稿之写』について

- ①書名, 『鯖江詩稿之写』(『待月亭間筆』第二十卷所収)
- ②巻数, 一卷.
- ③冊数, 一冊.
- ④著者名, 待月亭主人.
- ⑤編者名, 待月亭主人.
- ⑥出版地, 無し(出版せず).
- ⑦出版者, 無し(出版せず).
- ⑧出版年月日, 無し(出版せず).
- ⑨丁・頁数, 二丁・四頁.
- ⑩写真数, 無し.
- ⑪体裁, 和装袋綴 毛筆書写.
- ⑫大きさ, 縦26.5cm×横16.5cm.
- ⑬帙の有無, 無し.
- ⑭所蔵者, (植田命寧氏) 鯖江市立資料館.
- ⑮作者履歴, 省略.
- ⑯所蔵作品表, (後に挙げる)
- ⑰巻頭作品 (後に掲げる)
- ⑱所蔵作品表

全部で8作品を収めている。全て七言四句である。掲載順に作品番号を付けた。雅号と作者姓名を記し、作品番号を( )内に示す。

鳴鶴 青柳塘(1, 5). 雨山 山口鉄蔵(2, 7). 楽齋 土谷得所(3).  
学橋 大郷卷蔵(4). 東涯 曾我三郎左衛門(6). 雪齋 小倉亀蔵(8).

また、詩題と作品番号も挙げる。

宿題：午睡到暮(1, 2). 新蛩(3). 席題：夏日雜興(4, 5, 6, 7, 8).

宿題とは、前回の詩会に出された宿題であり、席題とは当日に出された詩題であろう。

この八首の次の頁に「鬪句」がある。これは、句の優劣を競うものである。

#### ⑰巻頭作品

午睡到暮 午睡して暮に到る

休咲午眠到日傾 咲（わら）ふ休（なか）れ午眠して日傾くに到り，  
便々蟠腹占閑情 便々として蟠腹して閑を占むるの情を。  
峯山処士成何事 峯山の処士何事をか成し，  
青史永留千載名 青史に 永く留めん 千載の名を。  
韻字，情・名（平声庚韻）。

「鬪句」について

句の優劣を競うかなり高度な遊びと言えよう。

\*誌面の都合で注記の欄に回す<sup>3)</sup>。

### 【作詩状況と学習の特徴】

○詩の勉強会に参加した人の中の何人か、或いは全員に宿題が出される。次に出席した時には、そこでまた新しく出された題で創作をする、ということが行われていたこと、また、「鬪句」も行われていたことが知られた。

## 3. 2 『吟草』について

- ①書名、『吟草』（『待月亭慢筆』第二十三卷所収）
- ②巻数、一卷。
- ③冊数、一冊。
- ④著者名、待月亭主人。
- ⑤編者名、待月亭主人。
- ⑥出版地、無し（出版せず）。
- ⑦出版者、無し（出版せず）。
- ⑧出版年月日、無し（出版せず）。
- ⑨丁・頁数、八丁、十二頁。
- ⑩写真数、無し。
- ⑪体裁、和装袋綴。毛筆書写。
- ⑫大きさ、縦26.5cm×17.5cm。
- ⑬帙の有無、無し。
- ⑭所蔵者、（植田命寧氏）鯖江市立資料館。
- ⑮作者履歴、（省略）
- ⑯所蔵作品表、（後に掲げる）
- ⑰巻頭作品（または代表作品）（後に掲げる）
- ⑱所蔵作品表、

全部で42作品を収めている。『吟草』は、中国人（唐代の詩人）の作品に倣って、その韻字を用いた作品を作っている。勉強会の作品の記録であるから、「吟草」（吟詠作品の草稿）としたのであろう。

唐人の作品四首と邦人の作品三十八首があるが、唐人と日本人の区別をせずに、掲載順に通し番号を付けた。

\*唐人の作品名と作者名。次にそれに倣って作った参加した邦人の作者名と作品番号を（ ）内に示す。なお、唐人の作品の番号は、1, 11, 15, 16, 17, 24である。

- ①「春懐」（五言八句＝律詩）、杜牧之（1）。

松堂 (2), 松齋 (3, 4), 学橋 (5), 松澗 (6), 麟友 (7), 溪叟 (8), 雲箒 (9), 沢井彦齡 (10).

②「春日」(五言律詩), 温庭筠 (11).

松堂 (12, 13), 麟友 (14) .

③「春日即事」(五言律詩)(三首) 耿漳 (15, 16, 17).

松堂 (18, 19, 20), 麟友 (21, 22, 23).

④「春日」(七言四句=絶句), 宋邕 (24).

松堂 (25), 松齋 (26) 麟友 (27).

⑤「春宴」用宋景文韻. (五言律詩).

松堂 (28), 松齋 (29), 鶴汀 (30), 学橋 (31), 松澗 (32), 麟友 (33).

「春山夜月」題で, 松堂 (34), 鶴汀 (35), 学橋 (36), 麟友 (37).

「暮春送花」題で, 松堂 (七律) (38), (五律) (39).

「暮春贈花」題で, 鶴汀 (五律) (40).

「暮春後花」題で, 鶴汀 (七律) (41).

「暮春送花」題で, 学橋 (五律) (42).

頭注 (の箇所) に寸評があり, 左下に「芥舟之謾評」とある.

⑰ 卷頭作品

卷頭には杜牧之の「春懷」(作品番号は1)を掲げている.

杜牧之 (八〇三~八五三). 姓は杜, 名は牧, 字は牧之, 号は樊川 (下屋敷が中国の長安市の南の樊川にあったのでいう). 晩唐前期の代表的詩人, 杜甫に対して「小杜」と呼ばれる. 樊川文集二〇卷, 樊川詩集四卷などがある.

春懷	春の懷	杜牧之
年光何太急	年光 何ぞただ急なる,	
倏忽又青春	倏忽として また青春なり.	
名月誰為主	名月 誰をか主と為す,	
江山暗換人	江山 暗に人を換ふ.	
鶯花潜運老	鶯花 潜かに老を運び,	
榮樂漸成塵	榮樂 漸く塵と成る.	
遙憶朱門柳	遙かに憶ふ 朱門の柳,	
別離応更頻	別離は 応に更に頻りなるべし.	

この詩は, 尾聯・七, 八句の記述に依ると, 杜牧が都を離れた地方で, 都 (長安) の城門では, 任地への赴任などで, 柳の枝を手折って別れを惜しむ人も多かろうと, 自分のかつての都生活を懐かしく思いながら作っている作品のようである.

この五言律詩の韻字「春, 人, 塵, 頻」(平声真韻)を用いて詩作するのである.

用杜樊川春懷韻

杜樊川の春懷の韻を用ふ	松堂
満庭朝雨歌	満庭の 朝雨は歌み,
薺葉翠初春	薺の葉は 翠の初春たり.
那語金門士	那をか語る 金門の士,
徒籌鬪管人	徒に籌す 鬪管の人.

感今詩費憶 今詩の憶を費やすを感じ、  
追古硯留塵 古硯の塵を留むるを追ふ、  
花柳従之色 花柳 之に従うの色、  
老心借寇頻 老心 寇を借りること頻りなり。

【作詩状況と学習の特徴】

松堂（第八代藩主詮勝）は杜牧の「春懐」の「春、人、塵、頻」（平声真韻）の韻字を「次韻」している。また、杜牧の詩の主旨に沿って詩作している。但し、杜牧と松堂では、立場が違うので、尾聯の内容は異なっている。

なお、頭注（の箇所）に「評」がある。芥川舟之の評である。舟之は、名は済、字は小軫、帰山と号した。通称は捨蔵、後、舟之と改めている。鯖江藩校の教授。

松堂の作品に対する批評はこうである。

「誠唐人也。詩人常以頻字為韻脚、多落凡句。今用借寇頻三字老練自見。」

「誠に唐人也。詩人常に頻字を以て韻脚と為すも、多くは凡句に落つ。今、借寇頻の三字を用ふ、老練自ずから見る」

以下に掲げる三十八首の作品も同じような形式で作られている。なお批評は三十八首の中の二十五首に付けられている。

○ ⑤の箇所の作品群などから、かなり微妙な表現も出来るようになってきていることが窺われる。

作品の巧拙はあるが、『吟草』の作品は一定のレベルに達していたと言えるのではなかろうか。

### 3. 3 『詩稿』について

- ①書名、『詩稿』（『待月亭漫筆』第二十三卷所収）。
- ②巻数、一卷。
- ③冊数、一冊。
- ④著者名、待月亭主人。
- ⑤編者名、待月亭主人。
- ⑥出版地、無し（出版せず）。
- ⑦出版者、無し（出版せず）。
- ⑧出版年月日、無し（出版せず）。
- ⑨丁・頁数、八丁、十五頁。
- ⑩写真数、無し。
- ⑪体裁、和装袋綴。毛筆書写。
- ⑫大きさ、縦26.5cm×横17.5cm。
- ⑬帙の有無、無し。
- ⑭所蔵者、（植田命寧氏）鯖江市立図書館。
- ⑮作者履歴、（省略）
- ⑯所蔵作品表、（後に掲げる。）
- ⑰巻頭作品（または代表作品）（後に掲げる）
- ⑱所蔵作品表

全部で76作品を収めている。詩会の作品であるから、詩稿（詩の原稿）としたのであろう。

\* 詩題（課題）名と参加した邦人の作者名と作品番号を（ ）内に示す。

- ①「春昼睡起」(七言絕句).  
 歸山 (1), 五雲 (2), 青涯 (3), 敦齋 (4), 恭堂 (5), 雲溪 (6).
- ②「春寒」(七言絕句).  
 歸山 (7), 古香 (8), 五雲 (9), 敦齋 (10, 11), 芝石 (12, 13), 青涯 (14),  
 雲溪 (15).
- ③「春水」(七言絕句).  
 歸山 (16), 五雲 (17), 敦齋 (18).
- ④「春風」  
 歸山・七言律詩 (19), 敦齋・七言絕句 (20), 芝石・五言律詩 (21), 范村・五言律詩 (22).
- ⑤「春月」  
 歸山・七言絕句 (23), 恭堂・七言絕句 (24), 敦齋・五言律詩 (25), 古香・七言絕句 (26).
- ⑥「春晴」  
 歸山・七言絕句 (27), 敦齋・五言律詩 (28).
- ⑦「紙鷺」  
 敦齋・七言絕句 (29).
- ⑧「春遊晚歸」(七言律詩).  
 敦齋 (30), 恭堂 (31).
- ⑨「花下小飲」  
 五雲・七言絕句 (32), 恭堂・五言律詩 (33), 敦齋・五言律詩 (34), 范村・五言律詩 (35),  
 古香・七言絕句 (36).
- ⑩「春夜步月」  
 敦齋・五言律詩 (37), 芝石・七言絕句 (38), 范村・五言律詩 (39), 雲溪・七言絕句 (40).
- ⑪「春日梧桐集」  
 恭堂・五言律詩 (41).
- ⑫「櫻花」  
 敦齋・七言絕句 (42), 范村・七言絕句 (43).
- ⑬「春雨」  
 歸山・七言律詩 (44).
- ⑭「暮春即事」  
 恭堂・七言絕句 (45).

附錄

- ①「春日雜興」(七言絕句). 古香 (46).
- ②「春日遊向陽溪」(七言律詩). 敦齋 (47), 恭堂 (48).
- ③「春曉」(七言絕句). 范村 (49).
- ④「新春積雪」(七言絕句). 青涯 (50).
- ⑤「春夜」(五言律詩). 敦齋 (51).
- ⑥「春日郊行」(五言律詩). 敦齋 (52).
- ⑦「机上瓶梅」(七言絕句). 敦齋 (53).
- ⑧「三月尽」(七言絕句). 敦齋 (54).
- ⑨「郊行即興」(七言絕句). 敦齋 (55).

- ⑩「遊玩月峯」（七言律詩）．敦齋（56）．
- ⑪「初夏」（五言律詩）．敦齋（57）．
- ⑫「新緑」（七言絶句）．帰山（58）．
- ⑬「初夏郊行」（七言律詩）恭堂（59）．
- ⑭「机上聞子規」（七言絶句）．敦齋（60）．
- ⑮「賦得四月清和雨乍晴」帰山・五律（61），古香・七絶（62），五雲・七絶（63），  
青涯・七絶（64），敦齋・五律（65），范村・五律（66），恭堂・七絶（67）．
- ⑯「初夏江村」（五言律詩）．帰山（68），古香（69），五雲・七絶（70），芝石・七絶（71），  
敦齋・五律（72），范村・五律（73），雲溪・七絶（74）．
- ⑰「夏日閑居」（五言律詩）．恭堂（75）．
- ⑱「初夏雨中」（七言絶句）．范村（76）．

⑰卷頭作品

春昼睡起 春の昼に睡より起く 帰山  
清昼睡闌夢已迷 清き昼 睡り闌にして夢に已に迷い、  
覺来未到夕陽低 覺め来たりて 未だ到らず夕陽の低きには、  
涉園欲檢春光好 園を歩き 檢せんと欲す 春光の好きを、  
吟杖却妨嬌鳥啼 吟杖 却て妨ぐ嬌鳥の啼くを。

韻字、低・啼（平声齊韻）。

末句の吟杖は、吟じつつ杖をついて歩くこと。それが可愛らしい声で鳴く鳥を鳴きやませてしまうということである。

【作詩状況と学習の特徴】

『吟草』の様に、唐人の作品に倣ったものではない。詩題に従って芥川先生の指導の下、創作したものである。以下に掲げる七十五首の作品も、これと同じ形式で、作られている。

また、この作品に対する批評はないが、以下の七十五首の中の五十二首の頭注（の箇所）に短評があり、最後の七十六番目の作品の箇所に「待月亭主人評」とある。

また、巻尾に五行の批評がある。それは、このようにかかっている。

「統読数遍 篇々金瓏玉碎 加以記公及秀綱評一臨 光彩的々射人 僕不復能贅一辞 且比諸前日之稿 実使人刮目 蓋帰山先生育英之力所及 又足以卜他日之盛運矣 大郷播妄言 佐秀綱汗顔妄評」

「統読すること数遍、篇々金瓏玉碎なり。加ふるに公及び秀綱の評を記すを以って一たび臨めば、光彩的々として人を射る。僕復たび一辞を贅する能はず。且つ諸を前日の稿に比ぶれば、実に人をして刮目せしむ。蓋し帰山先生の育英の力の及ぶ所、又以て他日の盛運を卜するに足る。大郷播妄言す。佐秀綱汗顔妄評す。」

○参加者は『吟草』とは全く異なる。参加者の年代、藩内の立場の違いもあるようである。作品の批評、末尾の総評などを通じて、切磋琢磨の様子が窺われる。

3. 4 『進徳館詩集』について

- ①書名、『進徳館詩集』（『汲古窟信筆』第九卷所収）
- ②巻数、一巻。
- ③冊数、一冊。

- ④著者名, 待月亭主人.
- ⑤編者名, 待月亭主人.
- ⑥出版地, 無し (出版せず).
- ⑦出版者, 無し (出版せず).
- ⑧出版年月日, 無し (出版せず).
- ⑨丁・頁数, 二丁 四頁.
- ⑩写真数, 無し.
- ⑪体裁, 和装袋綴, 毛筆書写.
- ⑫大きさ, 縦26.5cm×横16.5cm.
- ⑬帙の有無, 無し.
- ⑭所蔵者, (植田命寧氏) 鯖江市立図書館.
- ⑮作者履歴, (省略)
- ⑯所蔵作品表, (後に掲げる).
- ⑰巻頭作品 (または代表作品), (後に掲げる).
- ⑱所蔵作品表

全部で9作品を収めている。公の六十の賀に際し寿詩を奉ったのである。

浩齋・五言律詩 (1), 包耀・七言律詩 (2), 尹之・五言律詩 (3), 致知・五言12句=古詩 (4), 五雲・七言絶句 (5), 荀川・七言絶句 (6), 敦齋・七言絶句 (7), 芸窓・七言絶句 (8). (続いて「姓名」として雅号と姓名を記している). また, 頁を改めて, 詮実・五言律詩 (9), がある.

代表作品

詮実公の五言律詩を示す.

鶴齡不知算 鶴齡 算ふるを知らず,  
先見届華年 先ず見る 華年に届くを.  
瑞雪紗窓外 瑞雪 紗窓の外に,  
祥雲綺席前 祥雲 綺席の前にあり.  
群臣俱献寿 群臣 俱に寿を献じ,  
南極近臨筵 南極 臨筵に近し.  
遙望芙蓉頂 遙かに望む 芙蓉の頂,  
拜歌天保篇 拜して天保の篇を歌はん.

恭奉賀

殿君大人華字覽揆 殿君大人 華字覽揆 □□ (この□は印を押す箇所を示すのであろう)

詮実再拜 詮実 再拝す.

韻字, 年・前・筵・篇 (平声先韻).

### 【作詩状況と学習の特徴】

公の六十の賀に漢詩を作って奉る, というのは作品を作るだけのレベルに達していると言うことであり, 努力が実ってきていると言うことである.

### 3. 5 『進徳社詩』について

- ①書名, 『進徳社詩』 (『汲古窟信筆』第十卷所収)

- ②巻数，一卷.
- ③冊数，一冊
- ④著者名，待月亭主人.
- ⑤編者名，待月亭主人.
- ⑥出版地，無し（出版せず）.
- ⑦出版者，無し（出版せず）.
- ⑧出版年月日，無し（出版せず）.
- ⑨丁・頁数，二丁 二頁.
- ⑩写真数，無し.
- ⑪体裁，和本 袋綴. 毛筆筆写.
- ⑫大きさ，縦26.5cm×16.5cm.
- ⑬帙の有無，無し.
- ⑭所蔵者，（植田命寧氏）鯖江市立図書館.
- ⑮作者履歴，省略.
- ⑯所蔵作品表，（後に掲げる）.
- ⑰巻頭作品（または代表作品）（後に掲げる）.
- ⑱所蔵作品表

全部で9作品を収めている。全て七言絶句である。公の東都へ赴かれるのを送り奉る詩である。

なお、「進徳社詩」の前の頁に、同様の主旨の竹圃、芸窓が創作した七言絶句の詩が一首ずつある。この二首は「進徳社詩」の見出しの後の七首とは字体が違う。また、後に記す「雅号と姓名」の箇所の最初にこの二人の名前がある。これらのことから判断して、「進徳社詩」の見出しの後に七首をまとめて書いたため、竹圃、芸窓の作品は別の作品群と見られそうである。しかし、もとは九首でまとまった作品群であったと考えられる。そこで、作品番号は、1～7に追加して、竹圃、芸窓の作品にも8、9の作品番号を与えておくこととする。

琴石（1）、適齋（2）、卿園（3）、卷石（4）、范村（5）、松嶺（6）、東涯（7）、  
竹圃（8）、芸窓（9）。

なお、7作品の後に、「雅号と本名」が記されている。

「竹圃 土屋仲宅、芸窓 加藤文進、琴石 五十嵐亮助、適齋 小倉喜太郎、蕪園 喜多山儀兵衛、卷石 喜多山直吉、范村 内田侃治、松嶺 吉井清作、東崖 当我音九郎。」

#### ⑰巻頭作品

奉送我公朝東都 我公の東都に朝するを送り奉る 琴石  
銀槍金鉞玉花驄 銀の槍 金の鉞 玉花の驄、  
整々行装去向東 整々として行装して 東に向かって去（ゆ）く。  
河伯山神饗君処 河伯 山神 君を饗する処、  
船臻荒井浪尤融 船は荒井に臻って浪尤も融（やわら）く。  
韻字，東・融（平声東韻）。

#### 【作詩状況と学習の特徴】

- 殿の江戸へ出立なさるのをお見送りをする時に、漢詩を贈呈するのである。儀礼的ではあるが、そういう詩作が出来るほどにレベルが上がってきていると言うことである。

3. 6 『汲古窟詩集』について

- ①書名, 『汲古窟詩集』
- ②巻数, 一卷.
- ③冊数, 一冊
- ④著者名, 不詳.
- ⑤編者名, 不詳.
- ⑥出版地, 無し (出版せず).
- ⑦出版者, 無し (出版せず).
- ⑧出版年月日, 無し (出版せず).
- ⑨丁・頁数, 六十五丁.
- ⑩写真数, 無し.
- ⑪体裁, 和装袋綴. 毛筆写本.

(表紙中央に「詩稿」, その下に二行で「天保甲辰」(一八四四年), 左下隅に「汲古窟」と記す. 本文巻頭に「汲古窟詩集」と記す.)

- ⑫大きさ, 縦23.5cm×横15cm
- ⑬帙の有無, 無し.
- ⑭所蔵者, 青柳宗和氏.
- ⑮作者履歴, (省略)
- ⑯所蔵作品表, (後に掲げる)
- ⑰巻頭作品または代表作品 (後に掲げる)
- ⑱所蔵作品表

全部で253作品を収めている.

『汲古窟詩集』所収詩作者別・詩体別一覧表

合 計	松 濤				合 計	琴 岳				合 計	松 堂				作 者 名	句	言
	1	2	3	4		1	2	3	4		1	2	3	4			
4	245	193	178	83									4				
3		14			235	170	124	41		212	141	4	8	五 言 詩			
		40			244	211	129	59		224	154	36					
		206				219	137	87		243	203	90					
					14	226	155	114	11	210	96						
								2	204	162		12					
								1	218			16					
								1	250			26					
7					14				15				合計				
24	199	142	95	5	164	92	50	16	184	150	111	1	4	七 言 詩			
	209	148	99	10	192	108	51	45	205	159	126	2					
	237	166	109	17	198	112	52	46	233	160	128	15					
	238	173	121	28	251	118	53	47	234	161	135	76					
	246	185	122	63		123	82	48	242	163	140	77					
2	252	189	131	74	22	125	88	49	23	182	146	107					
		94				97	26			225	169	89	8				
		127			6		188	75	7		176	113					
							213	78			202	136					
								1	81			10					
								1	58			12					
26					28				32				合計				
33					42				47				総合計				

合計欄は詩数(首)を示す。他は作品番号である。

鯖江藩における「漢詩」学習の研究

合計	龍山			鹿川			誠園			松堂						作者名	句	言
	合計			合計			合計			合計								
1			249													4	五言詩	
			217			43			151	20					215	8		
4			222	1					153	65						12		
			241						67							16		
			253						102							26		
5				1			6								1	合計		
	230	180	18		227	165	44		104	22		207	167	110	13	6	七言詩	
	248	187	30		236	171	73		106	64		221	174	116	24	7		
		192	62			172	115		119	66		228	179	132	29	8		
		195	149			177	130		120	71		240	190	139	80	9		
14		201	168			183	143		152	72		247	194	145	84	11		
		208	175	14		220	147	11		103			200	157	100	12		
				8		156	93	27		105	69	3					8	
						214	98	60		70	21						10	
						138	79	7		101	68						12	
14				22				18				29				合計		
19				23				24				30				総合計		

合計	合計	聯句		合山	合盤	合松	合松	合松	合松	合東	合浩	合松	作者名	句	言	
		合計														合計
5															4	五言詩
							39					223		216	8	
44				2			56				1		1		12	
2															16	
1															26	
53											1	1			合計	
					61		91		25	37		23		181	19	七言詩
									38	57		231		186	31	
									55	85				196	117	
														197	133	
163				1		1	3	3		4	2	12		229	134	
														239	158	
	35	4	35	32										232		8
1			33								1					10
1			34													12
200	4			1		1	3	3		4	3	12			合計	
253	4			1		3	3	3		4	4	13			総合計	

⑰巻頭作品

甲辰大小（二首の第一首） 松堂

大竜正有二鬚分 大竜は正に有す 二鬚の分、  
四足能踏六気雲 四足は能く踏む 六気の雲。  
十八公煙脳麝墨 十八の公の煙は 麝を悩ます墨にして、  
始昼極好揮千軍 始めて昼に極めて好く千軍を揮ふ、  
韻字，雲・軍（平声文韻）。

【作詩状況と学習の特徴】

- 天保甲辰（西暦一八四四年）は十二月二日に弘化元年になる。詩集は元旦から冬まで一年間の作品がが集められている。連句も四回行われており、藩主以下、作詩の勉強に熱心であったことが窺われる。

3. 7 『進徳詩集』について

- ①書名，『進徳詩集』  
②巻数，一卷。  
③冊数，一冊。  
④著者名，無し。  
⑤編者名，無し。  
⑥出版地，無し（出版せず）。  
⑦出版者，無し（出版せず）。  
⑧出版年月日，無し（出版せず）。  
⑨丁・頁数，五十六丁，五十四頁。  
⑩写真数，無し。  
⑪体裁，和装 袋綴。ペンによる筆写である。  
⑫大きさ，縦27.5cm×横20cm。  
⑬帙の有無，無し。  
⑭所蔵者，福井大学図書館。（分類番号・・・H991，SIN）

（「福井師範学校女子部図書」の蔵印があるので，女子部の学生が筆写したものと思われる。）

- ⑮作者履歴，（省略）  
⑯所蔵作品表，（後に挙げる）  
⑰巻頭作品（または代表作品）（後に挙げる）。  
⑱所蔵作品表

全部で424作品を収めている。

鯖江藩における「漢詩」学習の研究

『進徳詩集』所収詩作者別・詩体別一覧表

合計	琢堂計	可堂計	春溪計	耕山計	蘆園計	琴石計	松堂計	作者名				
								句	言			
							194 (16句)	185	四言詩			
							2		合計			
				1	56				4句			
			1	22		3	373 195 232	1	8句			
								106	4・8句以外			
			1			3		1	合計			
				1				2				
161 176 221 75 115 116	7 13	278 150 159 175 191 199 219	6 36 53 76 104 130	133 275 283 305 79 114	5 17 34 55 79 114	30	326 261 142 64 4 342 280 143 77 19 350 297 162 101 21 358 303 174 119 35 359 307 200 124 54 375 318 218 136 63	4 19 21 35 54 63	3 15 33 62 74 88	418 357 324 206 2 419 392 335 214 29 397 336 244 131 401 340 272 144 402 346 302 170 409 356 312 187	26 59 82 97 139	4句
9	13	10	31	21	33	9	380 290 258 98 365 284 154	4	213 60 408 121	8句		
										4・8句以外		
9	13	10	31	21	33	9				合計		
9	13	10	32	22	36	13				総合計		

合計	鳴鶴計	歸山計	菊川計	勤斎計	文豹計	東涯計	作者名			
							句	言		
		212 205 186 168 (4句)					194 (16句)		四言詩	
					1				合計	
		334			321			183	4句	
		1			1				8句	
66 256	6	367 84 28 382 110 50	3	122 85 86	2	14 42	1	311 151 109 48 20 381 266 111 68 25	五言詩	
46 (12句)								153 39 (30句)(20句)	4・8句以外	
3	7	3	2	1	13				合計	
273 181 287 197 45 210 80 257 129 260 172	30 44	414 285 171 92 27 416 300 180 100 49 417 319 215 123 70 424 347 234 128 71 372 245 140 72 396 271 141 73	27 49 70 71 72 73	137 18 148 51 386 61 393 78 420 91 120	13 40 41 57	31	410 351 288 233 173 11 364 291 238 192 12 369 304 247 193 32 379 320 250 198 135 384 325 265 208 147 407 341 270 217 160	11 12 32 37 38 47	354 289 190 126 95 67 8 398 310 211 127 96 69 9 403 329 224 138 112 81 10 411 349 249 152 117 90 37 352 281 177 118 93 38 353 282 182 125 94 47	4句
230 155 268 156	8	390 337 107 24 400 371 330 99	24 99	87 23 43				415 370 339 298 163 102 58 391 366 333 231 108 89	58 89	8句
								65 (20句)	4・8句以外	
18	36	14	4	31	54				合計	
21	47	17	6	33	67				総合計	



⑰ 卷頭作品

卷頭には「進徳詩集」の下に「弘化丙午四月二日開筵」の注記がある。

松堂公宿題 松堂公の宿題

花園吟詩 禁酒字 花園にて詩を吟ず。酒の字を禁ず。

直依休沐地 直ちに休沐地に依り、  
冀足慰窮途 窮途を慰むるに足るを冀ふ。  
憔悴無浮躁 憔悴するも浮躁無く、  
流人在甌臬 流人は甌臬に在り。  
花飛鳩払羽 花は飛び鳩は羽を払い、  
池転鯉呈珠 池に転ずる鯉は珠を呈す。  
詩句発濃愁 詩句は濃愁より発し、  
道消心息徒 道消え心息<sup>いたづら</sup>ふも徒なり。

\* この作品には筆写の際の文字の誤写があるかもしれない。

【作詩状況と学習の特徴】

- 以下に開筵の月日を記す。月日だけ書いてある日は詩会が開かれて新しい題（席題）が出されて詩作をしている日である。宿題を集めない日でもある。しかし、その日に宿題が出されているのが普通である。「集」という日は、松堂公の宿題を集めている日である。

[ ] 内については詳細不明。

弘化丙午（一八四六年）四月二日開筵，四月十二日集，四月二十二日集，五月二日宿題，（丙午端午進徳館集分韻），五月十二日集，五月二十六日延会，〔閏五二日終会〕，閏五月十二日，閏五念六集，六月二日集，六月十二日集，六月二十二日集，七月二日集，七月十二日，七月二十二日集，八月二日集，八月十二日集，八月二十二日集，九月十二日集，九月二十二日集。

この詩集には、四百三十首に及ぶ作品が記録されている。これを見ると、規則通りに「二の日」に詩作に励んでいたことが分かる。藩公自らが率先して詩作し、宿題を出し、藩士を鼓舞し指導していたのである。

#### 4. まとめ

藩主は、比較的地位の高い藩士に対して、自ら詩会を主催し、宿題を出し、ときには添削や批評をしたりしている。また、藩士の中の実力のある人物、例えば藩校の教授などには批評をさせてもいる（『吟草』）。

一方で、藩校の教授には、別の詩会を主催させたり、指導をさせたりしている（『詩稿』）。

詩作の主題としては、中国の作品を模範として、その詩の題や韻字を使って作品を作ったり（『吟草』）、季節に沿って、詩の題を指導者が自由に決めて創作したりしている（『詩稿』、その他）。

また、詩形は、近体詩で、五言絶句、五言律詩、七言絶句、七言律詩が主である。また、他に連句を試みている（『汲古窟詩集』）。更に、一例だけが見られる、「鬪句」という句の優劣を競うかなり高度な遊びもしている（『鯖江詩稿之写』）。

藩校で決められた詩文を学ぶ日（二の日の午後の詩文会）などに、藩公以下、藩士たちも熱心に漢詩を作ったことが、『進徳詩集』などに詳しく記されている。上に述べたこれらの漢詩集に

よって鯖江藩の漢詩学習の状況が明らかになったのである。

参考文献

- 1) 鯖江市史編纂委員会 『鯖江市史 通史編』 上巻 第六節 近世の文化  
(718頁～729頁) 鯖江市役所 平成五年三月十日発行を参照。  
詳しくは、『鯖江市史』資料編 別巻 地誌類編の「越前鯖江藩学制」や『日本教育史資料』の「鯖江藩」の箇所、などを参照。
- 2) 鯖江市史編纂委員会 『鯖江市史 通史編』 上巻 第六節 近世の文化  
(718頁～729頁) 鯖江市役所 平成五年三月十日発行を参照。
- 3) 「闘句の表」について説明する。説明の便宜上、右から順番に番号を付ける。  
1, 唐人. 2, 東涯. 3, 雪斎. 4, 鳴鶴. 5, 学橋. 6, 唐人. 7, 雨山. 8, 同 (雨山). 9, 東涯. である。次に、句の下の判定を集計する。頭と尾は判断無し。1, 無し。2, 学と鳴が佳。3, 学, 鳴, 東, 唐が劣。4, 判断無し。5, 五人共に劣。6, 五人共に佳。7, 学が佳, 鳴と東が劣。8, 学, 鳴, 東が佳。9, 判断無し。ということであろう。

会の幹事は雨山である。七言絶句を作り、穆齋に批評を乞うている。訓読をする。

「翠竹は烟を籠めて葉陰は清く、溪に満つる雲影は茅盈に暗し。香尽き眠りより覚むるも猶ほ起くるに懶く、枕に響く松の濤は雨の声を半ばにす。睡より起き偶々題し呈す。穆齋老君へ、雨山樵夫拝し、伏して乞う、正斧を。」

闘句

唐人	東涯	雪斎	鳴鶴	学橋	唐人	雨山	同 (雨山)	東涯
竹密雨勢高	林疎月影多	松多風力微	人稀夜香深	茗源石室幽	空際山峯長	松多風力高	松多風力高	松多風力高
学橋	鳴鶴	唐人	唐人	唐人	唐人	唐人	唐人	唐人
佳	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣
会幹	雨山	雨山						
雨山	雨山							

翠竹籠烟葉陰清  
溪滿雲影茅盈暗  
香盡眠起猶覺懶  
起來偶々題呈  
穆齋老君  
雨山樵夫  
伏乞

翠竹は烟を籠めて葉陰は清く、  
溪に満つる雲影は茅盈に暗し。  
香尽き眠りより覚むるも猶ほ起くるに懶く、  
枕に響く松の濤は雨の声を半ばにす。  
睡より起き偶々題し呈す。  
穆齋老君へ、雨山樵夫拝し、  
伏して乞う、正斧を。」

仁愛大学開校の年から非常勤として勤めさせて頂いている。このたび拙稿を掲載して下さい、関係各位に感謝いたします。2008年11月6日記。